

「地域事業費制度の見直しで建設の環境が整った」

(仮称)厚生産業会館問題に関する副市長発言が波紋

8日の建設企業常任委員会における稲荷副市長の発言が市役所職員や議員の間で話題となっています。

その発言というのは、「地域事業費の見直しについて一定のご理解をいただいたことで(仮称)厚生産業会館の建設を進める環境が整った」というものです。

話題の発言は樋口議員の質問に対する答弁のなかで飛び出したものです。すでに、詳細な発言メモを持っている議員もいるので、見せてもらい、そのメモと私のメモとで稲荷発言を再現してみました。

市長の公約である以上は任期中に(仮称)厚生産業会館を建設するということは基本的方針

としては決まっていた。ただ、3月時点で市長が言われた「環境が整っていない」ということに関していえば、皆さんご案内の通り、地域事業費の関係が大きな課題だった。すでに合併前上越市の地域事業費が枠を確実にオーバーしてしまうことがわかっていっている中で厚生産業会館をやりますというのはあまりにも環境にマッチしたスタンスではない。それを踏まえたなかで、地域事業費の見直しを丁寧に議会のみなさん、地域のみなさんに説明してきた。(地域事業費の見直しについて)一定の理解が得られたというなかで、元々、市長としては公約に掲げているので、環境が一定整ったという判断をし、今回、補正予算を出した。

稲荷副市長は市役所でも議員の間でも誠実な人という評価があります。副市長は、市の考えを素直にのべただけのことだと思いますが、波紋の広がりによっては今後の市政運営に大きな影響を与えることになるかも知れません。

私の一般質問は27日か28日

一般質問が21日からはじまります。私が登壇するのは27日の午後遅くか28日の午前の予定です。

今回の一般質問では、長野県北部地震、7・

30 新潟福島豪雨、原子力災害対策などをとりあげます。ぜひ、傍聴にお出かけください。詳しいことは次号でお知らせします。



【シラネセンキュウ】牧区の「八方の風穴」近くにて撮影しました。



長野県北部地震が発生した3月12日からちょうど半年経った9月12日、朝早く大島区の林道牛ヶ鼻浦田線、被災した田んぼを見てきました。

まずは、林道のなかで最も大きな陥没があった場所(上の写真)です。仮復旧工事が行われ、車も通れるようにはなっていましたが、本格復旧はまだこれからといった状態でした。

この先の田んぼ、畦がスポッと抜けおち、液状化現象が起きていたところは、耕作ができず、荒れていました(下の写真)。来年度は新たな畦を内側につくろうというのでしょうか、ユンボによる工事の跡が見られました。

ちょっと見ただけですので簡単に評価はできませんが、農地の災害復旧に比べて、道路工事が遅れているという感じがしました。地元の人の中には、「来年の春までに工事が終わるか心配だ。早期に終わらせて安心できるように」という声もありました。

新潟県や上越市には、来春の耕作までには間に合わせてほしいと要請してきたところですが、今後の動きを注視していきたいと思えます。

毎日のように手紙が来て、電話もある。相手は短歌の仲間、平和と民主主義を求めて運動する仲間、兄弟など様々です。その人たちとのつながりをいつも大切に、小さな新聞を毎月発行している人を囲む会が先日、牧区の深山荘でありました。

小さな新聞のタイトルは「ぎ・むうん」。発行人は上越市大和在住の柳川月さん。一九七二年一月に創刊し、八月末で三四六号になりました。日頃の思いを綴ったエッセイ、短歌、いろんな仲間との交流記録等をB5サイズ4ページ建ての新聞にしています。月さんは先だって、百歳まで書き続けることを約束して話題になりました。

私がこの会に参加したのは、「ぎ・むうん」発行の裏話や月さんの文章、短歌などへの思いをたっぷり聞きたかったからです。それだけに、月さんの話が始まる前からどんな展開となるのかワクワクしました。

この会のメインは月さんの「九〇年の人生を語る」です。竹製の座イスに座った月さんは、製本された「ぎ・むうん」の一ページ目を開き、創刊号の最初の部分を読みはじめます。「暖冬異変の毎日をどうおすごしでいらつしやいますか。“このままですまないだろう、気味が悪いね”そんな声が聞かれるふしぎなことしの冬です」月さんの、歌声のような澄んだ声が部屋に響くと、会場の和室はシーンとしました。そして、続いて朗読された「あの日のまま」という詩、

雨漏りの天井と／ささくれたたみと／風のメロディーをうたう破れ障子と／うつすらとホコリをおいた白黒テレビと／立てつけ悪い玄関の戸と……（中略）みんなあの日のままですが／あの日のものでないものが　ひとつ／仏だんの奥の／ま新しいあなたの位はい……

前年に亡くなった夫を恋う想いがビンビンと伝わってきて、胸が熱くなりました。「ぎ・むうん」の出発点は夫への愛情だったのです。

文章を書くことが好きな月さんですが、それは子どもの頃からのものであることも初めて知りました。

月さんは、小学生の四、五年生の頃からお母さんに頼まれて、手紙の代筆をしていたといいます。月さんのお母さんは文章を書けないわけでもないのに、親戚などに出す手紙を月さんに頼みます。もちろん、何を書くかについては、自分で考えていることを少しばかり話して……。月さんが面倒くさがって、二、三日ほったらかしているとお母さんは「手紙出してくれたかい」と催促。仕方なしに書いていたそうです。でも、手紙を受け取った人たちの反応がとても良かった。「親戚の人が文章もいいし、字もうまいと言ってくれたよ」とお母さんから教えてもらった月さんは、その後、文章を書き続けるようになったのです。

月さんは、この他、家族がレッドページに遭った時のことや、会に参加した一人ひとりとつながりなどを丁寧に語り続けました。自分のことを語るだけでなく、参加者を話の中に登場させて静かに引き寄せていく、その見事さにうっとりしました。

「月さんを囲む会」には、地元はもとより、北海道や富山県などから元教師、ピアノの調律師、税理士など二〇数人が集まりました。調律師のMさんが、「月さんには『ばあちゃん』という言葉が似合わない。やっぱ、月さんと呼びたくなる」と言っておられました。参加者はみな、親しみと尊敬の念を抱いていましたね。

月さんはこの日、終始笑顔でうれしそうでした。ぜひ百歳まで書き続けてほしい。

コミュニティ政策学会が上越市地域自治区を調査

9月14日、岐阜大学の2人の研究者の方が木田庁舎に来られました。地域科学部の山崎仁朗先生と院生の東善朗さんです。お二人は前日から吉川区などに入られ、上越市における地域自治区、地域協議会の活動について調査を進めておられます。吉川区については、地域協議会が独自に住民アンケートを実施したことや、7つの「地域づくり会議」をベースにして「まちづくり吉川」が活発な活動を展開していることなどに大きな関心を寄せておられ、今回の調査となったということです。

この日は、市議としての立場で、地域協議会が1期目と2期目でどう変化しているかとか、上越市が昨年取り組んでいる「地域活動支援事業」、「地域事業費の見直し」などについてどう見ているかなどについて質問を受けました。約1時間半ほどではありましたが、研究者のみなさんの考えも聴くことができ、とても勉強になりました。前日からさがしていた旧吉川町公民館水源分館の活動の写真は14日の朝、市役所で見つけることができました。この写真のお陰で、かつて、学校が地域活動の拠点であったことを実感してもらえたのではないかと思います。

調査の合間に私の市政レポートのことやホームページ、ブログ、本などについても話題となりました。調査の準備としては思いますが、ブログや本を丁寧に読んでくださったのはうれしかったですね。

私が学生時代、えちご亭円志という芸名で落語をやっていたことを話したところ、全日本学生落語選手権大会の話になりました。今年の2月の大会では岐阜大学の三流亭今壺（さんりゅうてい・いまいち）さんが「二番煎じ」を演じ、最優秀賞を獲得したということです。岐阜大学が急に身近に感じられるようになりました。

